



DAY2のピバークで。ルーティンワークの後、本格的な整備の開始



ラリーフォーマットのサイン



ピバークで美味しい食事を楽しみながらコマ図をチェックします

BAJA RALLY 2015

Text : Yuji Shinohara Lyndon Poskitt Racing Reinforcement
Photo : Kevin Miklossy, Mark Kariya

ラリーで走るBaja California半島は想像をはるかに超える難コースの連続だった。
日本人として初めて走ったBaja Rally、夢のような数日間のレポート、その後編。



Lyndon Poskitt Racing



Reinforcement

HPNじゃなくて良かったな!

リンドンがそうって迎えてくれた

GCP(ゴールチェック)から20分くらいピバークまではリエゾンで、今日のピバークは村の中のスタジアムがラリーの会場へと様変わりしていた。ハードな1日を終え、チームのピットを探すとリンドンが派手に出迎えてくれた。「HPNじゃなくてよかったな!」と、やはりあのロックセクションにはリンドンも相当苦労したようで「今日はまさにダカールの過酷な1日のようだったよ!」という言葉が聞かされどれほど救われた事か。この日もポジションを落とす事なく18位でフィニッシュ。他のライダーも転倒やミスコースなどトラブルだらけの日だったようで、負傷者やリタイヤ者も出た様子であった。僕もロックセクションで2度転倒してしまい、その時にマフラーのブラケットを曲げたまま走る続けたものだから、スイングアームに大きな傷を付けてしまった。ごめんリンドン…。大事なマシン傷

つけちゃったよ。

ゴール後はルーティン通りのメンテナンス。疲れ切った体にマシン整備は堪えるが、自分でやるほかない。これといったダメージもないが、今やる事をやるかやらないか、明日へと続いているのがラリーなのだ。整備後は、スタジアムの外れに用意されたバケツのシャワールームで冷水を浴びる。そうして今夜もメキシカンな夕食とビールでリンドンのラリーと僕のラリーについて、スピードも体験も全く違うが、お互いの1日の出来事を語り聞きながら今夜も心地よいテント泊。訪れてくる村人達と写真を撮ったり、ステッカーを強請られたりBajaらしい体験を楽しんだ。

翌朝、STAGE3のスタート地点はピバークからすぐのところであった。昨日は4人ものリタイヤ者が出たらしく、それどころかQuinn Codyまでもが負傷してリタイヤしてしまっていた。僕

は今日も18番スタート。このままのポジションをキープしていきたい所だ。リエゾンのないこの日は、早朝の穏やかなツーリングかせなくすぐにSSの始まり。それどころかスタートしてすぐにフェッシュフェッシュ、メキシコではシュルトと呼ばれるそれはそれは細かい砂のエリアを抜けるようなハードなコース設定になっていた。そうしてついにやってしまった。

朝霧の中、ゴーグルに付いた水滴に自分で巻き上げるフェッシュフェッシュの砂がゴーグルにまとわり付き、それをグローブでこすのだからレンズは傷が沢山入ってとても視界が悪い。特別な事をしたわけではなく、いつも通りマイペースで走っていたのだが、ほんの一瞬アクセルを戻してしまい、フェッシュフェッシュの中でフロントから盛大に突っ込んでしまい転倒してしまったのだ





どんなに疲れていても翌日のコマ図のチェックとマーキングは欠かすことができません。ラリーの醍醐味です

BAJA RALLY 2015



Bajaの洗礼？

フェシュフェシュにやられた！

巻き起こる猛烈な砂煙りの中で、「ああ、映像で見たフェシュフェッシュってこういうのだったなあ」と感じながらバイクから投げ出され、自分のバイクがどこにあるのかも分からないくらいであった。肘で肋骨を押し付けたのがわかったのと同時に痛みと違和感を感じていた。こうなるとリズムにも乗れず、ペースが上がらない。それどころかライディングが守りに入ってしまうものだから、体力ばかりが消耗していく悪循環。あとはもう後続に抜かれるままで、ようやくCPIにたどり着く。見渡す限りの平原にあったCPIは体を休める所もない直射日光が容赦なく降り注ぐ灼熱の地であった。この日初めてCPIに到着する前に、背負っているハイドレーションバッグのドリンクを飲み干してしまった。ラリーでの転倒は本当に悪い連鎖を生み出すもので、喉の渇きと肋骨の痛みがさらにペースが落ちてしまい、集中力すら途切れさせてしまう。あまりの暑さにぼんやりとしてしまい、もう一度深い砂地で転倒。その後になんでもないようなギャップにリヤを弾ませてしまいフロントから滑り落

ちてしまった。

バイクを起こすとハンドガードが曲がっていて、ブレーキレバーが握れない角度にせりあがっていた。灼熱の日光の下で修理を始める。普段なら何でもない程度のトラブルなのだが、肋骨が痛み力が入らない。「もう最後尾になってしまったかな」などと考えながら作業をしていると馬に乗った村人がどこからともなく現れた。見渡す限りのサボテンと土漠の中で、どこからともなく現れた大きな馬に乗った大男は近寄るでもなく離れるでもなくこちらを見守っている。「手伝ってよ!」と声をかけてみるが、やはりジッとそこを動かない。真っ黒に日焼けした大男にギロっとした目で見守られながら修理を続けているのはあまり気分の良いものではないが、そうこうしているうちにオンコースのメディカルとマーシャルが到着した。怪我の程度を確認されたが、痛いだけで支障はないのでそれよりも力を貸してくれと、曲がったハンドガードを戻す事も協力してもらい修復を終わらせた。

僕より後ろにまだ2台いるという。怪我をして

いるライダーとマシンをトラブルを抱えたライダー。僕も先を急いだが、リペアに要した時間はそれなりのものであった。長い長い灼熱の土漠を抜けると、そこからはまたロックセクションのアップダウンが続いた。うんざりするほどのハードなエリアを一際大きなラリーマシンで進んで行く。今回のBaja Rallyに、純粋なラリーマシンでエントリーしていたのはリンドンと僕ともう一人の英国人。の3人だけがKTM450Rallyでエントリーしていた。他のライダーはみんな、軽量のエンデューロレーサーにビッグタンクとナビゲーションを装着しただけのマシンだった。初年度と2年目までは690ファクトリーレプリカなど、ラリーマシンのエントリーも多かったとの事だが、ハードなコース設定、4日間という比較的短い日程、給油ディスタンスも短いことから、結局みんなエンデューロマシンに換えていったのだという。確かに今年のBaja Rallyもエンデューロマシンをベースにした「ラリー仕様車」の方が適しているように感じた。でも僕は、自分の目標のためのトレーニングとして、フルスペックのラリーマシンで参戦する事の意義は大いに感じていたし、そこに後悔はなかった。



険しいルート連続。前号で書きましたが、HPNでの出場をあっさりと断られた理由がよくわかりましたよ!

満身創痍となってしまうけど

なんとかStage3をゴールする。GCP付近のサボテンの大きさには驚いたが、それよりもサボテンがブーツを突き抜けて刺さってくるのには参った。この日は29位でフィニッシュ。何より、無事にゴールできた事を心から喜べる1日であった。ゴール後に到着したビバークはプールもある快適なリゾートホテルだった。部屋を予約しているライダーやチームもいたが僕は今まで通りのキャンプ。ラリーを満喫するには快適なベットではなくテントが身に付いている。シャワーの代わりにプールに飛び込み、快適なビバークを満喫した。リンドンもこの日は転倒をしたらしく、バイクが派手に傷ついていた。それよりもコースオフした時にサボテンに突っ込み、体中にサボテンの棘が刺さって痛々しい姿であった。そういえばGCP直前に3mくらいの巨大なサボテンが倒れていたが…まさかリンドンの仕業であったとは。相変わらず豪快だ!!

メンテナンスは、増し締めやエアクリーナー、オイルの点検・交換などのルーティンワークのほか、ハンドル周りを分解して転倒のダメー

ジをチェック。大きなトラブルはなくてホッとした。メディカルで痛み止めと腫れ止めの錠剤を貰う。早く休みたいのは山々だが、コマ図へのマーキングも怠らない。夕食ではBaja Rally 2015 記念のジャージがライダー全員にプレゼントされ、全員で記念撮影を行った。背中にはそれぞれのネームがプリントされており、こういった喜ばせる演出も中々のものである。痛みを耐えながらテントに入るとあっという間に寝てしまった。



DAY3のゴール。負傷している僕を、気づかれないようにフォローしてくれていたメディカルライダーがいました!



途中のビバークでライダー全員に、それぞれの名前がプリントされたシャツがプレゼントされました。喜ばせ上手です!!



DAY4のスタート。笑顔ですが、実は肋骨6本、7ヶ所も骨折しているんです。痛い！



モンゴルや四国のTBIにも参加したローレンスさん。カナダ初のダカール完走者でもあるんです。いつも笑顔！



グランドゴールには、数時間前にゴールしていたリンドンが待っていてくれた。ありがとう!!



BAJA RALLY 2015



これでもかと

難コースがライダーを歓迎する！

ラリー最終日の朝はいつも感慨深い思いに駆られるものだ。ようやくゴールだ！という思いと、もう終わってしまうのか…という思いが交錯する。ただ、今回に限っては、身体の痛みもあり前者の思いの方が強かった。

STAGE4の朝は本当に真っ暗の中、4:30からリエゾンが始まった。100km程度と長いリエゾンで、暗闇の舗装路をひたすら走る。今までの心地よいBajaツーリングのようなものは程遠い、暗闇の中を寒さに凍えながら突き進むだけであった。リエゾンを終えSSのスタート地点に到着すると太陽も昇りすっかり明るくなっていた。この日のスタートは29番手、もうゴールを目指すのみだ。とにかくトラブルなく転倒せずに走り切る事に集中する。スタートでは皆がゴールに向かい励まし合う。僕への心遣いもひととき大きかった。痛みを堪えながらのライディングだが景色を楽しみラリーを満喫した。サンド、ロックセクション、ハイスピードを繰り返すBaja Rallyもこれで終わるのかと思うと寂しさ

もこみ上げてくる。そんな感傷に浸っていると、突然、ICOが正確に動かなくなってしまった。しばらく様子を見てみるが、どうも距離が計測できていない様子で、大きな誤差が出ている、何度もバイクを停め様子を見たが、いよいよ諦めてスピアのICOとスイッチを交換して再び走り出す。途中で2時間ごとに飲むように指示された痛み止めを飲みながら走る、やはり集中出来ないのか何度もミスコースをしてしまい、リカバリーにも時間を要してしまった。

今までに経験した事もない斜度のダウンヒルを下った後は、ヒルクライム。それも、2日前に「これがミスコースだったら二度と戻れないなあ…」と思っていた激しい下り坂が、この日はなんと登るルートになっている。もう本当に笑うしかなかった。そうして山岳地帯から標高が下がっている事を感じ始めると、いよいよゴールが近づく。もちろん美しい草原は用意されているはずもなく、最後の最後までフカフカのサンドを走りいよいよゴールに着いた。GCPではスタッフの他にMike Johnsonも待ちかまえてくれた。派手な演出でゴールを祝福してくれた。やり切っ

た思いと疲労困憊の中で、ラリーのゴールはいつも感傷的になってしまう。感動的な思いの中で、頭に水をかけてくれるスタッフ達へ感謝の思いが溢れる。ここからグランドゴールのエンセナダまで舗装路のリエゾンである。4日間を振り返りながら走るには十分な距離であった。

おそらく何時間も前にゴールしているはずのリンドンは、グランドゴールのホテルのエントランスで着替えも済ませインタビューもここそこにずっと外で待っていてくれた。4日間、ハードなスケジュールの中、チームマネージャーに徹してくれた私の妻も、疲れた表情を見せずに迎えてくれた。プールサイドまでマシンを運んでくれるリンドンは本当にいい奴だと思った。最初から最後まで、アマチュアである僕のためにバイクから全てを準備してくれた。感謝以外の言葉が無い。

痛みも忘れも笑顔だけが湧き上がる。この瞬間、僕はBaja Rally 最初の日本人フィニッシャーになった。総合20位でのフィニッシュである！そのことを誰もが讃えてくれるのが嬉しかったが、何より支えてくれたチームメイトやスタッ



フ達の為にもゴールすることが出来た事だけが嬉しかった。これだからラリーはやめられない。感動の思いの中、いよいよ表彰式、ファイナルパーティーを残すだけとなった。

次の参戦に向けて

Baja Rally から帰ってくると誰もが「どうだった!？」と聞いてくる。「Baja1000とどっちがいいかな?」と聞いてくる人も多い。Baja California半島は日本でもおなじみのエリアであり、オフロード・ライダー達のパラダイスだと聞かされていた。なるほどその通りの聖地であると思ったのだが、Baja RallyはBaja1000とは異なり「ラリー」である。ナビゲーションラリーはおそらくBaja1000以上に様々な困難が待ち構えている。スタートからゴールに至るまでの時間も長い。出会った風景や人々の言葉は強烈な印象と共に深い思い出として僕の胸に刻み込まれる。それはどこで開催されるからではなく、どんな内容で構成されているのかが違うのだと思う。帰国後にBaja1000の経験者達と話を

すると、残念ながら若干噛み合わないところが多いのは、やはりラリーとキャノンボール的なライディングの構成の違いなのだと思う。先にも記したが僕はBaja1000への出場経験が無い。誤解を恐れずに言えば、今現在もBaja1000に出場するという気持ちは湧いていない。帰国して、こうして様々な思い出を振り返ると、やはりそこには人々との思い出が多い。これも性分なのかもしれないが、僕が追い求めている事は、バイクに乗るという事だけではないのかもしれない。

ヨーロッパへはレースも含めて数え切れぬほど出かけているのだが、実は米国も含めて初めてのアメリカ大陸上陸であった。ただ、そこはやはり「地球」であり、大地とその環境を構成する人々は同じ「地球人」であった。

夢を実現する事とは、行動を起こす事なのだとラリーは一教えてくれた。今回のBaja Rallyへの参戦もその一部分にすぎないのだと思っている。最も大きなラリーに出場したいと思い、それを目標にしてきたのは今も変わらない。ただ今回のBaja Rallyをきっかけに少しだけその思

いに変化が生じた。もっと色々な大地に出かけてみたい、色々な風景のなかで様々な人々の言葉が聞きたい。その風景と経験がラリーの最大の魅力なのだという事だ。

今年は再びモンゴルを目指すつもりだ。今回リンドンが僕に与えてくれた経験を生かしてチームを構成してみたいと思っている。どこまで実現できるかわからないが、行動を起こしていきたいと思う。夢はその大きさとは関係なく、そのゴールに向かい突き進む力こそが、実現した時の喜びの大きさになるのだとラリーはいつも教えてくれる。

このラリーに参戦するきっかけを与えてくれた Lyndon poskitt Racing と親友のリンドン。サポートをしてくれた Rally Management Service / ICO racing のデιβと、そしてラリーを支えてくれた全ての友人とサポートしてくれた妻に心からの感謝を伝えたい。